ミニバスケットボール教室参加児童の適応性の検討 —スポーツ参加と適応性の関係を中心に—

種 村 紀 代 子 (京都女子大学)
丹 羽 劭 昭 (奈良女子大学)

A Study on the Adjustment of School Children in Mini-Basketball

—An examination of the relationship between sports
participation and adjustment—

Kiyoko TANEMURA *
Takaaki NIWA **

* Kyoto Women's University, Faculty of Letters, Higashiyama-ku, Kyoto (605)

** Nara Women's University, Faculty of Letters, Nara (630)

Abstract

The purposes of this study, which consists of three studies, are to clarify the adjustment of the children who participate in mini-basketball, and to examine the relationship between sport participation and adjustment. The subjects were 1300 children who either participated or did not.

Both cross-sectional and longitudinal studies are applied to the subjects, and the following results were obtained.

1) The adjustment of those children participating in mini-basketball is very high and is supposed to have been influenced by participation in mini-basketball.

2) The adjustment of children is heightened by various conditions, such as play, sports, study and so on. But participation in team sports may be supposed to bring about a level of high adjustment.

3) Those children, who are provided with conditions that can heighten their adjustment, such as play, sports and so on, acquire very high adjustment levels, as in the cases of elementary school 4th and 5th graders.

4) When the children with high adjustment enter the 6th grade, their adjustment does not change or decrease, although they are provided with the same good conditions as the 4th and 5th graders. Judging from the fact that they, however, keep their adjustment higher than other children, it can be observed that adjustment does not increase, after having reached a certain level, unless other factors are given.

This phenomenon is peculiar to the 6th graders, and the newly given factor may be supposed to be that which is called 'study'.

緒 言

昭和40年代から、子どもの屋外遊びの減少が問題とされ、特に都会においては、子どもの発育・発達や身体的健康・体力問題¹⁾だけでなく、精神的側面にも大きく影響しているのではないかと考えられ、深刻な社会問題となった²⁾。こうした状況のもとで、児童の屋外遊びとパーソナリティとの関係が検討された結果³⁾⁴⁾⁵⁾⁶⁾²¹⁾、外遊び時間の長い子、活発に遊ぶ子、夢中になって遊べる子、友達の大勢いる子は、そうでない子より情緒が安定し、社会的適応も高いことが推論された。

そこで、外遊びと同様に楽しい集団的身体活動としての児童のスポーツ活動もパーソナリティに影響するのではないかと考えられ、多面的な検討がなされてきた¹⁰⁾¹¹⁾¹²⁾¹³⁾¹⁴⁾¹⁵⁾²⁰⁾。

これらの研究は、近年盛んになっている児童のスポーツ教室活動の研究と併せて、スポーツとパーソナリティとの関係を解明する意図をも含んでいた。そして、著者らはスポーツらしいスポーツに参加しはじめる小学校高学年のミニバスケットボール教室（以下、ミニバスと略す）参加児童のパーソナリティの検討から若干の結論を得ることができた¹⁵⁾。

すなわち、ミニバス参加児童は、不参加児童より、情緒が安定し、主導性に富み、さらに女兒では社会的適応性があり、活動的な傾向をもつが、こうしたことはスポーツ参加による影響が関係しているのではないかと推論された。これらの研究では、外的環境の影響を受けにくい性格を問題にしたため、もう少しパーソナリティの表層、すなわち、外的環境の影響を受け易い領域として、態度あるいは社会的な適応性⁷⁾をとりあげて検討すべきとの結論に達した。

そこで本研究では、性格より環境の影響を受けやすいと考えられる適応性をとりあげ、ミニバスケットボール教室参加児童の適応性を明らかにするとともに、スポーツと適応性との関係を検討す

る意図をも含めて、ミニバスケットボール参加と適応性との関係を検討したい。具体的には次の3つの研究から検討する。

1. ミニバス参加児童の適応性の検討
2. ミニバス参加児童の適応性を規定する要因の検討
3. ミニバス参加児童の1年間の適応性の変化、およびその変化を規定する要因の検討

なお、この教室は、バスケットボールコート3面の体育館を使用し、練習は約週1回2時間である。京都市内の小学校約20校から4年生以上の男女が参加しており、集団構成は男女別の同年齢集団である。夏休みにはキャンプや合宿、その他宿泊を伴う試合等もあり、年間約50日開設されている。指導者は10名、児童の出席率は約90%である。

研究Ⅰ ミニバスケットボール教室参加児童の適応性の検討

目 的

ミニバスケットボール教室参加児童の適応性について、一般児童との比較を中心に検討する。

方 法

対象；京都市内の小学校から集まっている4～6年生で、ミニバス参加児童（104名）と一般児童（680名）、計784名（表Ⅰ－1）。

期日；昭和57年2月～3月

手続；上記対象に、①適応性診断テスト（長島他共著）②遊びに関する調査 ③ソシオメトリックテストを記名による質問紙法により実施した。ソシオメトリックテストは、選択範囲を「一緒に練習するグループ（各学年の男女別）」、一般児童については「同じ学級」とし、選択基準は「バスケットボールの試合」、選択数は無制限とし、集計のとき5位までをとり、ソシオメトリックスか

表Ⅰ-1 対 象

性 別		男 子				女 子				総 計
対 象	学 年	4	5	6	計	4	5	6	計	
ミニバス教室参加児童 (A)		24	23	17	64	11	16	13	40	104
一般児童	他スポーツ参加児童(B)	50	67	28	145	12	20	13	45	190
	スポーツ不参加児童(C)	82	58	76	216	125	83	66	274	490
	計	132	125	104	361	137	103	79	319	680
総 計		156	148	121	425	148	119	92	359	784

ら選択排斥得点を求めた。なお、適応性診断テストは10項目からなり、前半5特性は自己自身に対する適応性を測るもので個人適応と呼ばれ、後半5特性は社会に対する適応性を測定するもので社

会適応と呼ばれ、両者の合計から適応性を調べるようになっている標準化された検査である(表Ⅰ-2参照)。

表Ⅰ-2 スポーツ教室参加児童と不参加児童の適応性の比較

対 象 特 性		男 子					女 子				
		A ミニ教室参 加児童	B 他のスポー ツ参加児童	C 不参加児童	t 検定		A ミニ教室参 加児童	B 他のスポー ツ参加児童	C 不参加児童	t 検定	
		64	145	216	A-C	B-C	40	45	274	A-C	B-C
1 異常傾向	$\bar{X}$	11.34	10.26	10.02	***	—	10.73	10.11	10.30	—	—
	u	2.60	2.67	2.77			2.85	2.67	2.85		
2 神経質傾向	$\bar{X}$	11.06	10.17	10.13	**	—	11.00	10.31	10.38	—	—
	u	2.56	2.55	2.60			2.30	2.43	2.58		
3 自尊感情	$\bar{X}$	8.52	7.94	7.47	*	—	8.83	8.67	7.76	*	—
	u	2.97	3.05	3.11			3.04	3.02	3.08		
4 退避の傾向	$\bar{X}$	10.00	8.88	8.87	**	—	10.00	8.91	8.92	*	—
	u	2.87	2.72	2.95			2.75	2.52	2.95		
5 自己統制	$\bar{X}$	9.73	9.43	8.77	*	*	10.03	9.98	9.54	—	—
	u	2.60	2.91	2.80			2.61	2.47	2.70		
6 社会的技術	$\bar{X}$	9.91	8.79	7.94	***	**	11.05	10.67	9.16	***	***
	u	3.34	3.24	3.13			2.91	2.92	2.82		
7 統率性	$\bar{X}$	9.17	8.14	6.44	***	***	9.88	9.47	6.85	***	***
	u	3.94	3.62	3.56			2.83	3.71	3.22		
8 家庭関係	$\bar{X}$	9.88	8.76	8.68	**	—	10.18	9.98	9.76	—	—
	u	3.06	3.37	3.33			3.48	3.37	3.53		
9 学校関係	$\bar{X}$	9.89	9.37	8.83	*	—	10.58	9.38	9.10	**	—
	u	3.26	3.36	3.09			3.15	3.68	3.32		
10 近隣関係	$\bar{X}$	11.44	10.55	9.86	***	*	11.68	11.09	10.88	—	—
	u	2.51	2.77	3.06			2.51	2.37	2.71		
個 人 適 応	$\bar{X}$	50.66	46.68	45.26	***	—	50.58	47.98	46.89	*	—
	u	10.24	10.29	10.96			10.43	9.27	10.84		
社 会 適 応	$\bar{X}$	50.28	45.61	41.74	***	**	53.35	50.58	45.75	***	**
	u	11.72	12.07	10.92			10.18	11.41	10.95		
適 応 性	$\bar{X}$	100.94	92.28	87.00	***	*	103.93	98.56	92.65	***	—
	u	20.19	20.13	19.84			19.53	19.32	19.55		

注) *...P <.05 **...P <.01 ***...P <.001

結果と考察

1. ミニバスケットボール教室参加児童の適応性の検討

1) 一般児童との比較

ミニバス参加児童と一般児童の適応性を図Ⅰ-1に示す。図Ⅰ-1から、ミニバス参加児童は一般児童と比較して、男女とも自己に対する適応性、社会に対する適応性が高く、自己と環境との間に心理的に調和のとれた関係が保持されていると考えられる。これは、スポーツ参加による影響ではないかと考え、一般児童のうち、他のスポーツ教室に参加している児童(B)と参加していない児童(C)に分けて、さらに各特性について比較検討する。

図Ⅰ-1 ミニバスケットボール教室参加児童と一般児童の適応性の比較

図Ⅰ-2 ミニバスケットボール教室参加状況と適応性との関係

	一男	---女
D1…休まない	137人	53人
D2…ときどき	68	23
D3…よく休む	3	8
N.A.	1	1
* P < .05 *** P < .001		

2) スポーツ教室不参加児童との比較

表Ⅰ-2から、①ミニバス参加児童(A)は、スポーツ教室不参加児童(C)と比較して、各特性において高く、安定した調和のとれた状態にあることがわかる。特に男子では、各特性に有意な差がみられ、高い適応性を示している。②他のスポーツ教室参加児童(B)と不参加児童(C)の間には、男女とも社会的技術(社交性)と統率性において有意差がみられる。すなわち、スポーツ教室参加による影響が、この2特性において考えられる。

3) スポーツ教室参加状況と適応性との関係

次に、もしスポーツ教室に通っていることが適応性と関係するとするならば、スポーツ教室参加状況と適応性に一定の関係がみられる筈である。

そこで、図Ⅰ-2をみると、休まずにスポーツ教室によく通っている児童ほど、個人適応、社会適応ともに高く、特に女子でその傾向が強い。しかし、練習を休まない児童は、始めから社会的適応性の高い児童であるかもしれないので、これだけでスポーツ教室に通うことによる影響と結論することはできない。したがって、他の多くの資料から総合的に判断しなければならないが、少なくともその可能性が高いことは考えられる。

2. 遊びと適応性との関係

従来の研究から、スポーツ参加と共に屋外遊びも適応性と関係すると考えられる。そこで、遊びやテレビ、勉強等と適応性との関係も検討しておく必要があるので、それらの関係を図Ⅰ-3～12に示す。

1) 屋外遊び時間と適応性

図Ⅰ-3から、屋外での遊び時間の長い児童は短い児童より個人適応の低い傾向がみられる。長時間だらだらと屋外で遊ぶことは適応性に好影響を与えないのではないかと、そして、遊びの量よりはむしろ質の方が重要な意味をもつのではないかと考えられる。

図 I - 8 遊び友達の数と適応性との関係

図 I - 9 志向型と適応性との関係

N.A. 1

図 I - 10 屋外遊戯への夢中度と適応性との関係

N.A. 11 4

図 I - 11 屋内遊戯(テレビ)への夢中度と適応性との関係

N.A. 5 4

図 I - 12 勉強への夢中度と適応性との関係

N.A. 7 6

2) 遊び時間の満足度と適応性

図 I - 4 から、現在の自分の遊び時間に満足している児童は、不満足な児童より、男女とも個人適応、社会適応ともに良好で、全体としてもより高い適応性をもっている。

3) 遊びの活発さと適応性

図 I - 5 から、屋外で活発に遊んでいる児童は、そうでない児童より、男女とも個人適応、社会適応が高く、かなり安定した適応性をもつ。

4) 楽しく遊べる場所の多さと適応性

図 I - 6 から、近所に楽しく遊べる場所の多い児童は、少ない児童より適応性が高い。

5) 運動の上手さと適応性

図 I - 7 から、自分は運動が上手にできると

思っている児童ほど、男女ともに適応性が高い。

こうした傾向を生む理由については、自分の運動機能がすぐれているという認知や経験の積み重ねが、自己認知の枠組みをつくり、この有機体的自己概念がすぐれた適応性を生む重要な要因になっているからであると考えられる⁹⁾。したがって態度形成の立場から、子どもの時の自己概念形成に及ぼすスポーツ教室参加の影響を重視する必要がある。

6) 遊び友だちの数と適応性

図Ⅰ-8から、近所に遊び友だちの数の多い児童ほど、男女とも適応性が高く、特に社会適応にその傾向がみられる。

7) 志向型と適応性

図Ⅰ-9から、屋外遊び志向型の児童は、そうでない児童より適応性が高い傾向がみられる。

8) 屋外遊びへの夢中度と適応性

図Ⅰ-10から、屋外遊びに夢中になれる児童は、そうでない児童より適応性が高いと思われる。

9) 屋内遊びへの夢中度と適応性

図Ⅰ-11から、屋内遊び(テレビ視聴含む)のとき、気がちる児童はそうでない児童より、男子において、やや適応性が低い、女子ではあまり顕著な関係はみられない。

10) 勉強への夢中度と適応性

図Ⅰ-12から、勉強に夢中になれる児童ほど、個人適応、社会適応ともに高く、非常に安定した適応性をもっている。

以上のことから次のような結論を導くことができる。

結 論

1. ミニバスケットボール教室参加児童は、一般児童と比較して、個人適応、社会適応が男女ともに高い。
2. スポーツ教室参加は、より高い適応をもたらしと考えられる。特に、社会的技術と統率性でその傾向がいちじるしい。
3. 遊び時間に満足し、活発に遊び、遊び場に恵まれ、運動が上手にできると思い、そして友だちの多い児童は、そうでない児童より適応性が

高い。

4. 勉強や屋外遊びに夢中になる児童は適応性が高い。特に、勉強に夢中になれる児童は個人適応、社会適応ともにいちじるしく高い。

研究Ⅱ ミニバスケットボール教室参加児童の適応性を規定する要因の検討

目 的

研究Ⅰから、児童のスポーツや遊びが適応性を高めることが推察された。そこで、研究Ⅱでは、多数標本によって、再度、ミニバス参加児童とその他の児童の適応性の傾向を確かめるとともに、児童の適応性を強く規定する要因を多要因の中からみつけ、明らかにしたい。

方 法

対象；京都市内の小学校から集まっているミニバス参加児童と一般児童の4年～6年生計1239名(表Ⅱ-1)。

手続；上記対象に、昭和53～57年の各年度末に研究Ⅰと同じテストを同じ手続きで実施した。適応性を規定する要因は重回帰分析によって抽出した。

結果と考察

1. ミニバスケットボール教室参加児童と他の児童との適応性の比較

研究Ⅰと同じ傾向であるかどうかを確かめるため、適応性の比較を図Ⅱ-1と図Ⅱ-2に示す。

1) 適応性の領域の比較

図Ⅱ-1から、ミニバス参加児童が、個人適応、社会適応、適応性のいずれにおいても他の児童より高く、次いで、他のスポーツ教室参加児童が高い。全般に、女子が男子より高く、安定した調和のとれた状態にあることがわかる。

2) 適応性各特性の比較

表Ⅱ-2から、①男女とも、ミニバス参加児童(A)は不参加児童(C)と比較して、各特性において高

表Ⅱ-1 対 象

対象		ミニバスケットボール教室参加児童						一般児童 (56年度)			総計
性別	学年	53年度	54年度	55年度	56年度	57年度	計	スポーツ教室	その他	計	
男 子	4年初	—	—	20	20	16	56	—	—	—	
	4年	20	21	24	24	22	111	50	82	132	
	5年	—	15	20	23	21	79	67	58	125	
	6年	—	—	13	17	18	48	28	76	104	
	計	20	36	77	84	77	294	145	216	361	
女 子	4年初	—	—	21	10	12	43	—	—	—	
	4年	35	28	24	11	17	115	12	125	137	
	5年	—	22	18	16	11	67	20	83	103	
	6年	—	—	15	13	12	40	13	66	79	
	計	35	50	78	50	52	265	45	274	319	
総 計		55	86	155	134	129	559	190	490	680	1239

表Ⅱ-2 ミニバスケットボール教室参加児童と他の児童との適応性の比較

対 象 特 性		男 子						女 子					
		A ミニバス 群	B 他スポー ツ群	C スポーツ 不参加群	t 検定			A ミニバス 群	B 他スポー ツ群	C スポーツ 不参加群	t 検定		
		294	145	216	A-C	B-C	A-B	265	45	274	A-C	B-C	A-B
1 異常傾向	$\bar{X}$ u	11.30 2.73	10.26 2.67	10.02 2.77	***	—	***	11.29 2.65	10.11 2.67	10.30 2.86	***	—	**
2 神経質傾向	$\bar{X}$ u	11.24 2.51	10.17 2.55	10.13 2.60	***	—	***	11.02 2.57	10.31 2.43	10.38 2.58	**	—	—
3 自尊感情	$\bar{X}$ u	8.95 3.06	7.94 3.05	7.47 3.11	***	—	***	9.58 2.78	8.67 3.02	7.76 3.08	***	—	*
4 退避の傾向	$\bar{X}$ u	9.91 3.07	8.88 2.72	8.87 2.95	***	—	***	10.44 2.54	8.91 2.52	8.92 2.95	***	—	***
5 自己統制	$\bar{X}$ u	9.60 2.84	9.43 2.91	8.77 2.80	***	*	—	10.44 2.65	9.98 2.47	9.54 2.70	***	—	—
6 社会的技術	$\bar{X}$ u	9.42 3.28	8.79 3.24	7.94 3.13	***	**	—	10.74 2.92	10.67 2.92	9.16 2.82	***	***	—
7 統率性	$\bar{X}$ u	8.79 3.74	8.14 3.62	6.44 3.56	***	***	—	9.57 3.17	9.47 3.71	6.85 3.22	***	***	—
8 家庭関係	$\bar{X}$ u	10.14 3.04	8.76 3.37	8.68 3.33	***	—	***	10.88 2.87	9.98 3.37	9.76 3.53	***	—	—
9 学校関係	$\bar{X}$ u	9.87 4.88	9.37 3.36	8.83 3.09	**	—	—	10.25 2.97	9.38 3.68	9.10 3.32	***	—	—
10 近隣関係	$\bar{X}$ u	11.00 2.85	10.55 2.77	9.86 3.06	***	*	—	11.94 2.42	11.09 2.87	10.88 2.71	***	—	*
個人適応	$\bar{X}$ u	50.99 10.97	46.68 10.29	45.26 10.96	***	—	***	52.76 10.05	47.89 9.27	46.89 10.84	***	—	**
社会適応	$\bar{X}$ u	49.22 12.38	45.61 12.07	41.74 10.92	***	**	**	53.37 10.31	50.58 11.41	45.76 10.95	***	**	—
適 応 性	$\bar{X}$ u	100.21 20.11	92.28 20.13	87.00 19.84	***	*	***	106.14 18.34	98.56 19.32	92.65 19.55	***	—	*

注) *…P <.05 **…P <.01 ***…P <.001

く、有意な差がみられる。②他のスポーツ教室参加児童(B)と不参加児童(C)の間には、男女とも、社会的技術（社交性）と統率性において有意差がみられ、研究Ⅰと同様であるところから、スポー

ツ教室参加による影響がこの社会的技術と統率性において特に強いと考えられる。③ミニバス参加児童(A)は、他のスポーツ教室参加児童(B)と比較しても、個人適応の多くの特性で高いことがわかる。

図Ⅱ-1 ミニバスケットボール教室参加児童と他の児童との適応性の比較

これらの傾向は、研究Ⅰと同様であり、横断的資料で見ると、こうした傾向は恒常的なものと推察される。また、こうした傾向がスポーツによるものかどうかについてのこれ以上の確認は、少なくとも ①他の要因も含めて多要因の同時解

表Ⅱ-3 個人適応を規定する要因

対象	順位	個人適応を規定する要因	標準偏回帰係数	規定率(%)
ミニバス児童	1	社会適応	.522	30.99
	2	遊びの活発度	.139	8.24
	3	塾・ならい事への参加度	.126	7.51
	4	選択地位指数	.094	5.60
	5	遊び場所の富裕度	.091	5.41
	6	夢中度(勉強)	.086	5.09
	7	選択排斥得点	.079	4.67
	8	遊び時間	-.076	4.51
全19要因の決定係数			.485	
一般児童	1	社会適応	.574	43.39
	2	夢中度(勉強)	.119	9.04
	3	選択排斥得点	.111	8.38
	4	スポーツ教室への参加度	.099	7.50
	5	遊び時間	-.067	5.03
	6	塾・ならい事への参加度	.061	4.60
	7	遊び時間の満足度	.059	4.44
	8	排斥地位指数	-.057	4.28
全18要因の決定係数			.445	

注) 規定率 = $\frac{\text{各々の標準偏回帰係数}}{\text{標準偏回帰係数の絶対値の総和}} \times 100$

析をする ②追跡的検討をする、の2方法によらなければならない。そこで、まず第一の方法を用いて検討する。

2. ミニバスケットボール教室参加児童と一般児童の適応性を規定する要因の重回帰分析的検討
児童の適応性は多くの要因によって影響を受けるので、多要因の同時解析によって適応性に影響する要因を検討する必要がある。ここでは、個人適応、社会適応、適応性をそれぞれ目的変量とし、その他の測定項目を説明変量とする重回帰分析によって検討する。その結果を表Ⅱ-3～5に示す。なお、これらの表に示す規定率は、全要因の標準偏回帰係数の絶対値の合計を100%としたときの各要因の占める率を百分率で示したもので、目的変量に対する説明変量の規定の強さをあらわす目安を示すものである⁸⁾。

1) 個人適応を規定する要因

表Ⅱ-3 から、個人適応を、ミニバス参加児童群では19要因で約49%、一般児童群では18要因で

表Ⅱ-4 社会適応を規定する要因

対象	順位	社会適応を規定する要因	標準偏回帰係数	規定率(%)
ミニバス児童	1	個人適応	.508	31.06
	2	遊び友達の数	.187	11.43
	3	遊び時間	-.152	9.31
	4	遊びの活発度	.135	8.24
	5	選択地位指数	.083	5.10
	6	ミニ経験年数	.083	5.08
	7	遊び場所の富裕度	.075	4.59
	8	運動の上手・下手の意識	.073	4.48
全19要因の決定係数			.499	
一般児童	1	個人適応	.512	37.40
	2	夢中度(勉強)	.146	10.68
	3	選択排斥得点	.133	9.73
	4	遊び友達の数	.101	7.39
	5	遊びの活発度	.087	6.34
	6	運動の上手・下手の意識	.081	5.95
	7	屋外遊び志向	.064	4.70
	8	選択地位指数	.053	3.91
全18要因の決定係数			.504	

表Ⅱ－5 適応性を規定する要因

対象	順位	適応性を規定する要因	標準偏回帰係数	規定率(%)
ミニバス児童	1	遊びの活発度	.298	21.88
	2	遊び友達の数	.174	12.83
	3	夢中度(勉強)	.173	12.67
	4	塾・ならい事への参加度	.127	9.30
	5	ミニ経験年数	.106	7.80
	6	運動の上手・下手の意識	.094	6.88
	7	遊び時間	-.093	6.85
	8	排斥地位指数	-.074	5.45
	全18要因の決定係数		.349	
一般児童	1	夢中度(勉強)	.322	24.30
	2	遊び時間の満足度	.121	9.13
	3	遊び友達の数	.109	8.21
	4	運動の上手・下手の意識	.107	8.11
	5	遊び時間	-.107	8.08
	6	スポーツ教室への参加度	.099	6.91
	7	排斥地位指数	-.083	6.30
	8	遊びの活発度	.075	5.70
	全17要因の決定係数		.298	

約45%説明していることがわかる。各群の個人適応を最も強く規定する要因は社会適応で、両者が密接に関係していることがわかる。次いで、ミニバス群では遊びの活発度や塾・ならいごとへの参加度であり、一般児童群では勉強への夢中度、選択排斥得点、スポーツ教室への参加度である。一般児童では、遊び、スポーツ教室以外に勉強が個人適応に重要な意味をもつと考えられる。すなわち、小学校高学年では勉強に夢中になれる児童ほど、個人適応が高いことがわかる。これは、何事にも夢中になれるという性質が適応性を高めるものか、勉強に夢中になることが適応を高めるのか明らかではないが、他の資料(後述)からみると、対象とした児童にとっては勉強が重要であり、両者が複合して個人適応を高めていると考えられる。

2) 社会適応を規定する要因

表Ⅱ－4 から、ミニバス参加児童群では、個人

適応が関係しているのは当然として、遊び友だちの数、遊びの活発度、ミニバス経験年数が多いほど社会適応が高いことがわかる。

一方、塾などに行かない日の遊び時間が負の関係を示している。つまり、遊び時間が短いほど社会適応がよいということになる。これは、上学年になるほど遊び時間が減少し、適応性は高くなっていることから、このような結果になったと考えられる。また、特にミニバス参加児童の場合は、自由な時間に勉強する児童ほど社会適応がよくなるということは考えられることである。なお、この問題は今後の課題としたい。

一般児童群では、個人適応に次いで、勉強の夢中度、人に好かれる児童、遊び友だちの数、遊びの活発度と続く。やはり、勉強と外遊びが社会適応と強く関係していることがわかる。

3) 適応性を規定する要因

表Ⅱ－5 から、ミニバス参加児童群では適応性を規定する要因は、遊びの活発度、友だちの数、勉強への夢中度、塾・ならいごとへの参加度、ミニバス経験年数等である。

一般児童群では、決定係数が約30%と低いが、それを前提にみると、勉強への夢中度が最も高く、遊び時間の満足度、友だちの数、運動の上手・下手の意識と続く。一般児童では、勉強への夢中度や遊び時間の満足度が高く、遊び時間が負の関係を示すことから、やはり、小学校高学年では勉強が生活に重要な位置を占め、長く遊ぶことは負の適応につながるが、遊び時間が短くても満足できる遊びをしている児童は適応性が高くなると考えられる。

結 論

1. 適応性は、男女ともミニバスケットボール教室参加児童、次いで他のスポーツ教室参加児童が高く、また、女子が男子より高い。
2. 個人適応と社会適応は密接に関係しており、適応性は、何事にも(勉強、ミニバス、他のスポーツ教室、塾やならいごとなど)熱中して、積極的に続ける児童や、友人から好かれる児童ほど高いと考えられる。

3. ミニバスケットボール教室参加児童群では、ミニバス経験年数の長い児童ほど適応性が高い。
4. 適応性を規定する要因は、ミニバスケットボール教室参加児童群と一般児童群では、ミニバス経験年数を除くと比較的類似している。
5. 適応性は、一般的には遊びの質（夢中度、活発度、満足度、友人数など）や勉強への夢中度、すなわち、日常生活行動に打ち込む態度と、さらに友人関係に強く規定されると考えられる。

研究Ⅲ 1年間の適応性の変化、およびその変化を規定する要因の検討

目 的

研究Ⅱでは、適応性を規定する要因を横断的資料から多要因の同時解析という方法で検討したが、それらをより明らかにするためには、前述したように追跡的資料からも検討する必要がある。そこで、研究Ⅲでは、ミニバスケットボール教室参加児童を追跡し、1年間の適応性の変化を調べるとともに、その変化を規定する要因を検討する。

方 法

対象；京都市内の小学校から集まっているミニバス参加児童のうち、1年間の追跡調査のできた4～6年生、総計358名（表Ⅲ-1）。

手続；上記対象に、各年度末に、研究Ⅰ・Ⅱと同様の調査を同様の方法でおこなった。1年間の適応性の変化を規定する要因は、重回帰分析によって検討した。

結果と考察

1. ミニバスケットボール教室参加児童の適応性の1年間の変化

図Ⅲ-Ⅰに示すように、同一児童の1年間の適応性の変化量は少ないが、5年までは男女とも1年間でわずかに上昇し、6年生でやや下降する。従来の研究からも^{14) 18) 19)}、一般に男女とも適応性がそれぞれ一定の高さまで上昇した後、停滞ま

表Ⅲ-1 対 象（追跡児童）

		追跡年度					総計
性	学年	53→54年度	54→55年度	55→56年度	56→57年度	57→58年度	
男	4 初→4 年	—	19	20	16	14	69
	4 年→5 年	15	8	17	14	19	73
	5 年→6 年	—	12	10	13	19	54
	計	15	39	47	43	52	196
女	4 初→4 年	—	21	10	12	8	51
	4 年→5 年	22	9	16	11	8	66
	5 年→6 年	—	15	12	12	6	45
	計	22	45	38	35	22	162
総 計		37	84	85	78	74	358

図Ⅲ-1 ミニバスケットボール教室参加児童の学年別、適応性の1年間の変化

たは下降すると考えられたが、ミニバス参加児童でも同様の傾向を示したと思われる（但し、有意差はない）。

しかし、それまでに非常に高い適応性をもっているため、下降したとはいえ、一般児童に比べ、なお高い適応性を示している。

2. 1年間の適応性の変化を規定する要因の検討

各個人における適応性検査の個人適応、社会適応、適応性の各得点の1年間の変化量を目的変量とし、その他の要因（2回目の調査内容を用いた）を説明変量として重回帰分析をおこなった。

1) 個人適応（自己自身に対する適応）

表Ⅲ-2から、男女とも、個人適応の1年間の変化を規定する最も大きな要因は社会適応であり、研究Ⅱでも示されたが、個人適応と社会適応とが密接に関連していることがわかる。次いで、男子では遊び時間の短いこと、外遊びの夢中度、遊びの活発度、塾やならいごとへの参加度、勉強への夢中度と続く。塾に真面目に参加し、運動や遊びと勉強の両方に頑張る児童ほど個人適応が高くなることが推察される。

しかし、予想に反して、遊び時間や遊びの活発度がーの値を示したので、詳細に検討するため、

表Ⅲ-2 個人適応の変化を規定する要因

対象	順位	個人適応を規定する要因	標準偏回帰係数	規定率(%)
男子	1	社会適応	.194	11.45
	2	遊び時間	-.165	9.76
	3	夢中度(屋外遊び)	.159	9.39
	4	遊びの活発度	-.151	8.94
	5	塾・ならい事への参加度	.147	8.68
	6	夢中度(勉強)	.147	8.65
	7	運動の上手・下手の意識	-.121	7.13
全(19)要因の決定係数			.174	
女子	1	社会適応	.205	12.01
	2	ミニ経験年数	-.172	10.06
	3	遊び場所の富裕度	-.154	9.02
	4	選択排斥得点	-.151	8.82
	5	ミニ教室への参加度	-.147	8.63
	6	遊びの満足度	-.147	8.62
	7	選択地位指数	-.132	7.74
全(19)要因の決定係数			.163	

注) 規定率 = $\frac{\text{各々の標準偏回帰係数}}{\text{標準偏回帰係数の絶対値の総和}} \times 100$

遊び時間別、および遊びの活発度別の適応性の変化を図Ⅲ-2・3に示した。図Ⅲ-2・3をみると、遊び時間の短いこと、あるいは、遊びが不活発であることが適応性を高めるのではなく、遊び時間の短い児童は前年では適応性が低かったためそれが1年間で上昇し、また、活発度の高い児童は前年に非常に高い適応性をもっていたので、次年度でやや下降したことから、このような結果がでたことがわかる。

女子についても、ミニバス経験年数の短いこと、楽しく遊べる場所の少ないこと、選択排斥得点の低いこと、ミニバス教室をよく休むことが個人適応を高めるという印象を与えるが、これらも同じく、図Ⅲ-4・5に示すように、これらの条件の児童は、前年に適応性が低かったため、それが上昇してこのような結果になったことがわかる(遊び場所、選択排斥得点の資料は紙面の都合で省略)。また、前年で高い適応性をもっていた児童(図

図Ⅲ-2 遊び時間別、適応性の1年間の変化

図Ⅲ-3 遊びの活発度別、適応性の1年間の変化

Ⅲ-5ではミニバス教室を休まない児童)は、男子では停滞、女子では下降の傾向がみられるが、適応性が下がったとはいえ、なお、参加度の低い児童よりは非常に高い値を示している。

2) 社会適応(社会に対する適応)

表Ⅲ-3から、社会適応を最も強く規定するのは、男子ではミニバス経験年数の少ないこと(図Ⅲ-4)、次いで個人適応、遊びの不活発さ(図Ⅲ-3)、選択排斥得点が下位であること(図Ⅲ-6)であり、女子では、遊び時間に満足していないこと(図Ⅲ-7)、ミニバス教室をよく休むこと(図Ⅲ-5)などである。

さて、社会適応は個人適応と強く関係し、友人数の多いこと(男子)、選択排斥得点の高いこと(女子)が大きな規定要因となることは常識と一致する。しかし、男子でミニバス経験年数の少ないこ

図Ⅲ-4 ミニバス経験年数と適応性の1年間の変化

図Ⅲ-5 ミニバスケットボール教室参加度別、適応性の1年間の変化

図Ⅲ-6 選択排斥得点上位・下位別適応性の1年間の変化

図Ⅲ-7 遊び時間の満足度別、適応性の1年間の変化

表Ⅲ-3 社会適応の変化を規定する要因

対象	順位	社会適応を規定する要因	標準偏回帰係数	規定率(%)
男子	1	ミニ経験年数	-.295	12.76
	2	個人適応	.288	12.44
	3	遊びの活発度	-.261	11.30
	4	選択排斥得点上位・下位	-.213	9.21
	5	遊び時間	-.177	7.66
	6	遊び友達の数	.176	7.61
	7	排斥地位指数	-.150	6.48
全(19)要因の決定係数			.265	
女子	1	遊びの満足度	-.224	13.32
	2	ミニ教室への参加度	-.190	11.30
	3	選択排斥得点	.189	11.22
	4	個人適応	.143	8.48
	5	遊びの活発度	.141	8.38
	6	遊び時間	-.087	5.16
	7	排斥地位指数	.082	4.86
全(19)要因の決定係数			.142	

と、遊びの不活発さ、選択排斥得点が下位であること、女子で遊び時間に満足していないこと、ミニバス教室をよく休むこと、遊び時間が少ないことが関係することについては従来の研究結果に反する。

そこで、図Ⅲ-2～7をみると、それらの児童は、前述と同様、前年の社会適応が低かったため、1年間で大きく伸びたと考えられる。また、図Ⅲ-3～7から、活発に遊ぶ児童やミニバス経験年数の長い児童、ミニバス教室を休まない児童、選択排斥得点の上位の児童、遊び時間に満足している児童は、前年度ですでに高い適応性をもつため、やや低下の傾向を示しているが、それでもなお高い社会適応を示していることがわかる。

3) 適応性(総合)

表Ⅲ-4から、適応性を強く規定しているのは、男子では友人数の多いこと(図省略)屋外遊びの不活発さ(図Ⅲ-3)、遊び時間の短かさ(図Ⅲ-2)、勉強・屋外遊びの夢中度(図省略)、ミニ

表Ⅲ-4 適応性の変化を規定する要因

性別	順位	適応性の変化を規定する要因	標準偏回帰係数	規定率(%)
男 子	1	遊び友達の数	.209	11.32
	2	遊びの活発度	-.192	10.38
	3	遊び時間	-.187	10.11
	4	夢中度(勉強)	.183	9.87
	5	ミニ経験年数	-.169	9.13
	6	排斥地位指数	-.168	9.10
	7	夢中度(屋外遊び)	.165	8.93
全(18)要因の決定係数			.186	
女 子	1	遊びの満足度	-.237	15.91
	2	選択排斥得点	-.217	14.56
	3	ミニ教室への参加度	-.167	11.22
	4	選択地位指数	-.166	11.17
	5	排斥地位指数	.136	9.12
	6	ミニ経験年数	-.117	7.84
	7	遊びの活発度	.108	7.27
全(18)要因の決定係数			.150	

バス経験年数の短いこと(図Ⅲ-4)、女子では、遊び時間に満足していないこと(図Ⅲ-7)、選択排斥得点の低いこと(図Ⅲ-6)、ミニバス教室にあまり熱心に参加していないこと(図Ⅲ-5)などである。これらのことは、前述したように、前年に適応性の低くなる条件をもっていた適応性の低い児童が、1年間で高くなったことを示すと共に、逆に、前年に非常に高い適応性をもっていた児童は、1年後にやや低下したということを示している。要するに、4年から参加しているミニバス参加児童は、4年、5年と次第に適応性が高くなるが、6年ではそれ以上高くなり、むしろ低くなる傾向がみられる。したがって、ミニバス経験年数からみると、1・2年目、すなわち、4・5年生の時、適応性は最も伸び、3年目の6年生では、むしろ低下の傾向を示す結果となる(図Ⅲ-4)。

結 論

1. 適応性が高くなる条件を備えていた児童が、すでに非常に高い適応性をもっている場合には、それ以上高くなることは困難であるが、適応性の低い児童は1年間で高くなる傾向を示

す。この傾向は男女に共通している。

2. 男女とも、個人適応の1年間の変化を規定するもっとも大きな要因は社会適応であり、個人適応と社会適応とは密接に関係している。
3. 男子では、勉強でも屋外遊びでも、それぞれ夢中になる児童は、適応性が高くなる。
- 4.すでに適応性の高い児童の場合、遊びの質(活発度、満足度、時間、場所の富裕度など)や、ミニバス教室参加度、ミニバス経験年数、友人関係に良好な条件をもつ児童でも、1年間で適応性が停滞またはやや下降するが、なお、他の児童より高い適応性をもっている。
5. 男女とも、ミニバス経験によって、適応性は大体5年生まで高くなり、6年生では一般児童の傾向と同様にむしろ低下の傾向を示す。この傾向は、中学受験のための勉強が児童の生活の中心に位置づけられることによると推察されるが、なお詳細な検討を要する。

総 括

ミニバスケットボール教室参加児童と一般児童の合計約1300名を対象に、横断的研究と追跡的研究を含め、3つの研究からミニバスケットボール教室参加児童の適応性を明らかにするとともに、ミニバスケットボール教室参加と適応性との関係を検討した。その結果を総括すると次のようになる。

1. ミニバスケットボール教室参加児童の適応性は非常に高く、それは、ミニバス教室参加による影響と考えられる。
2. 児童の適応性は、遊びやスポーツ、勉強の諸条件等、多くの要因によって高められるが、スポーツ参加は、特に高い適応性をもたらすと考えられる。
3. 遊びやスポーツ等、適応性が高くなる条件を備えている児童では、小学校4・5年生でいちじるしく高くなる。
4. 適応性の高い児童の場合、4・5年のときと同様の適応性を高める条件があっても、6年生になると、適応性が停滞するか、やや下降する。しかし、なお、他の児童より高い適応性を維持

することから、適応性は一定の水準に達した後は、別の要因が加わらないとそれ以上は高まらないと考えられる。その新しく加わる要因は勉強と考えられる。

文 献

- 1) 正木健雄, 子どもの体力, 大月書店, 1979, Pp. 212.
- 2) 丹羽劭昭, 高橋健夫, 入口 豊, 長沢邦子「児童の屋外遊び時間を規定する要因の検討」スポーツ教育学研究, 6-1: 1-12, 1986.
- 3) 丹羽劭昭, 高橋健夫, 入口 豊「児童の遊びの研究 第3報」日本体育学会第25回大会号, 167, 1974.
- 4) 丹羽劭昭, 高橋健夫, 入口 豊「児童の遊びの研究 第5報」日本体育学会第26回大会号, 148, 1975.
- 5) 丹羽劭昭, 高橋健夫, 入口 豊, 白銀茂夫, 長沢邦子「児童の屋外遊びの比較研究 (2)」日本体育学会第32回大会号, 192, 1981.
- 6) 丹羽劭昭, 高橋健夫, 入口 豊, 白銀茂夫, 長沢邦子「児童の屋外遊びの比較研究 (4)」日本体育学会第33回大会号, 168, 1982.
- 7) 丹羽劭昭, スポーツと人間形成, 松田岩男, 清原健二編「スポーツの心理」大修館, 1966, 84-107.
- 8) 丹羽劭昭, 長沢邦子「女子大生のスポーツ参加を規定する要因の検討」体育学研究, 23-2: 109-119, 1978.
- 9) 丹羽劭昭, 辻野 昭編「スポーツと教育」の展開, 第一法規, 1984, 82-84.
- 10) 種村紀代子, 黒田公子, 山根尚美, 牛窪洋子, 丹羽劭昭「ミニバスケットボール教室参加者のパーソナリティ (1)」日本体育学会第27回大会号, 127, およびその発表資料, 1976.
- 11) 種村紀代子, 黒田公子, 山根尚美, 牛窪洋子, 丹羽劭昭「ミニバスケットボール教室参加者のパーソナリティ (2)」日本体育学会第28回大会号, 153, およびその発表資料, 1977.
- 12) 種村紀代子, 黒田公子, 山根尚美, 牛窪洋子, 丹羽 加昭「ミニバスケットボール教室参加者のパーソナリティ (4)」日本体育学会第29回大会号, 148, およびその発表資料, 1978.
- 13) 種村紀代子, 黒田公子, 山根尚美, 丹羽劭昭「ミニバスケットボール教室参加者のパーソナリティ (5)」日本体育学会第30回大会号, 152, およびその発表資料, 1979.
- 14) 種村紀代子, 黒田公子, 山根尚美, 丹羽劭昭「ミニバスケットボール教室参加者のパーソナリティ (6)」日本体育学会第31回大会号, 207, およびその発表資料, 1980.
- 15) 種村紀代子, 丹羽劭昭「スポーツ教室参加児童のパーソナリティの検討」体育学研究, 25-1: 1-11, 1980.
- 16) 種村紀代子, 黒田公子, 山根尚美, 牧垣純子, 丹羽劭昭「ミニバスケットボール教室参加児童の適応性 (2)」日本体育学会第33回大会号, 170, および発表資料, 1982.
- 17) 種村紀代子, 黒田公子, 山根尚美, 丹羽劭昭「ミニバスケットボール教室参加児童の適応性 (3)」日本体育学会第34回大会号, 141, および発表資料, 1983.
- 18) 種村紀代子, 黒田公子, 山根尚美, 丹羽劭昭「ミニバスケットボール教室参加児童の適応性 (4)」日本体育学会第35回大会号, 130, および発表資料, 1984.
- 19) 種村紀代子, 黒田公子, 山根尚美, 丹羽劭昭「ミニバスケットボール教室参加児童の適応性 (5)」日本体育学会第36回大会号, 139, および発表資料, 1985.
- 20) 牛窪洋子, 種村紀代子, 黒田公子, 山根尚美, 丹羽劭昭「ミニバスケットボール教室参加者のパーソナリティ (3)」日本体育学会第28回大会号, 154, および発表資料, 1977.
- 21) 牛窪洋子, 種村紀代子, 黒田公子, 山根尚美, 丹羽劭昭「児童の遊びとパーソナリティ」日本体育学会第29回大会号, 149, および発表資料, 1978.